

第二期 第三十号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2019.01.20 定有堂書店 発行

本屋(じ)

奈良 敏行

(定有堂 店主)

本屋(じ)

餅つき奇譚

車縦走断層紀行 ②

謹賀新年

坪井日記 ⑫

冬帝

権威性コンプレックス

数か月ぶりに定有堂へ

鳥取あれこれ その二十九

埋もれ逝く名歌

おでんと豚汁

なりたいた話

奈良 敏行

ワクサカソウへイ

芝野 浩貴

ムラカミヒロシ

齊藤 仁昭

五百川知子

戸國 航

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

あきの素生

ドラメリア



…… 編集後記

二〇一八年の正月に帰省していたYさんが教えてくれた本に、『ショッピングモールから考える』というのがあった。いま七回転している。ひとつ強く記憶に残っているのが、モールでは「内部こそがファサード」だという指摘だった。外装に意味はない。外部がない空間、例えば宇宙ステーションみたいなものだ、という話だった。モールではファサードは「吹き抜け」のことらしい。いきなり縮小した話になるが、本屋だと「窓」のことかな、と思った。むろん書棚に囲まれて現実には窓があるわけではない。ただ本の固まりにそれぞれ中心核があり、それが「窓」と呼ばれる。時々棚の一角に表紙を見せた面展が出現する。それは小カテゴリーのアイコンでもある。それを「窓」という。

十二月十七日に、出版ジャーナリストの石橋毅史さん

が来訪された。前日に大阪でイベントがあったとのこと
で、大阪の本屋さん「本は人生のおやつです」さんも同
行されていた。

石橋さんにとって定有堂のファサード、つまり「窓」
は、柵に潜ませた「鏡」だ、とわたしは以前から信じて
いる。信じているから、場所はときおり移動するがこの
「石橋さんミラー」は重視している。今回も石橋さんの
目に留まり、さりげなく「本おや」さんを導いて、「ど
う？」と鏡を示す。「本おや」さんは、「え？なに？」
と首をかしげるだけだ。石橋さんは「気になりませんか？」
と重ねる。「別に…」と「本おや」さん。

わたしは話を引き取って、「後ろめたい人は気になる
ようです」と説明した。説明したつもりだったが、石橋
さんまで「え？」という表情だった。そういえば、しば
らく前に取材でみえたカメラマンの女性も、ここで立ち
止まった。目と目があって親しみを感じた。現に間を置
かずに再訪してくださった。わたしは、やはりこの鏡も
「窓」のひとつだと思っている。

「後ろめたさ」というのは、分かりにくかったかもし
れない。たんに「とまどい」といってもよかった。

これはわたしの独断的な類推だが、最近読んだ本の一
文を思い出す。「未来が、現在起きていることに構造を
与えている」。例えて「存在しない文の終わりは、存在

しないが文に構造を与えている」とも書き加えてあった。
存在しないものとは未来だ。鏡を見た瞬間、未来が変わ
る。現在は形のないもので、概念レベル（構造）でのみ
自己イメージを統一している。人は他者との比較（構造）
でのみ自己認識を手中にする。本を読むとはそういうこ
とだ。鏡に自分が写り、身体レベルが出現する。そして
概念（未来）が地すべりを起こす。じつは何かが変わった
のだ。

「音信不通」執筆者の「うしきのどか」さんが、環境
大学のショップでちょうど仮設書店「三週間書店」を開
催しているので、三人で見学に行くことにした。学食で
ランチ・ミーティングも兼ねたものだ。これは牛木さん
の考えた大学の「ファサード」だ。大学にはファサード
が欠けている。そしてそれは「本の売り場」というの
が、牛木さんの発見とチャレンジだ。

むろん売り場の方々の協力と理解も大きな動機づけだ。
石橋さんと「本おや」さんが、レジに本を持って向かっ
た。レジがスムーズでなかったと訝しがっていた。じつ
は、学生を支援するため、手数料なしでの別会計処理で、
用意したリストに書き込み、つり銭も別サイフという、
とても手間隙かかるやり方だったのだ。

それを聞いて、学生と売り場や多数の人を巻き込んだ
「本屋ごっこ」だったのだと気がついた。その夜、湯船

の中で読んでた本で「ごっこ」というのは勝ち負けのない「ゲーム」だと意表をつけて説明する一文に出合った。「ごっこ」という言葉に出合い、それまでの文脈の意味が変わる。大学での「本屋ごっこ」、これもまた「窓」のひとつなんだと思った。

牛木さんには、この「ごっこ」がきちんと見えていたのだ。

鏡に出合い何かが変わる。言葉に出合い何かが変わる。鏡と言葉は、石橋さんにとって、同質のものだったのだろうか？

2018. 12. 20

(参考)

東浩紀・大山頭『ショッピングモールから考える』幻冬舎 2018

井崎正敏『考えるとはどういうことか?』洋泉社 2008



餅つき奇譚

ワクサカソウへい

(文筆業)

室のドアを開ける。先に到着していたカメラマンや音声スタッフたちは、すでにセッティングを始めている。

ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん……。外から聞こえてくるのは、先ほどの人たちが餅をつく音。

「年末だね」

「餅つき大会をやる人たち、渋谷でもいるんですね」
やがて他のスタッフや出演者らも集合し、昼過ぎより収録が開始された。台本に沿いながら、進行していく現場。そこに、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん……、と餅をつく音が断続的に響いてくる。

「この音、マイクが拾っちゃったりしないんですか？」
「全然問題ないよ」

収録はつつがなく夕方を終了し、出演者や技術スタッフたちはそれぞれ「よいお年を」と口にして、マンションから去っていった。作家とディレクター陣たちだけは部屋に残り、映像のチェック作業を始める。冬の日暮れは早い。カーテンの向こうの外は、すでに真つ暗である。ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん……。

「まだ、餅をついているね」

誰ともなしに、そんな声が上がった。

「ちよっと長くないですか？」

たしかに。私が到着した時には、すでに餅つきは開始

特に山場やオチがあるわけではないのだけでも、先
日体験した、「ささやかな奇妙」を紹介したい。
年の瀬のとある日、正午前。
企画担当しているテレビ番組の仕事のため、私は渋谷
を歩いていった。駅から繁華街を抜けて、奥まった住宅地
にあるマンションの一室へと向かう。
昨今、「空き室」をレンタルスペースとして貸し出す
マンションが増えていて、今日はそこを利用して収録を
行うのである。割安で使用することができるため、制作
費の冷え込んできているテレビ業界としては、こういう
た場所の存在はかなりありがたい。
到着したのは、だいぶ古ぼけたマンションだった。ふ
と見ると、エントランスではこのマンションの住民とお
ぼしき人々が集まり、餅つき大会を開催していた。それ
を横目にエレベーターで三階へと上がり、指定された号

されていたのだから、かれこれ六時間、エントランスの人たちは杵をふるっていることになる。

ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん……。

「もしかして、誰も餅つききの終わらせ方を知らなかったりして」

あの餅つき大会の人たちは、餅をついてはみたものの、どこでどのように終わらせたらいいのか、誰も知らないのだ。（いいんだよな……？こんな長く餅をついていて、いいんだよな……？）という若干の不安を胸に、互いの様子を伺いながら進められる果てなき餅つき大会を想像し、みんなが笑う。

しかし、笑っていられなくなったのは、夜が深まった頃合いである。

ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん……。

「まだやってる！」

時計を見れば、もう九時間も餅つきの音が続いていることになる。九時間つてすごい。ロサンジェルズとかに行ける時間である。これはもう、狂気を感じざるを得ないではないか。

「あれだけついたら、餅もべちよべちよですよね」

そこでみんな、同じ想像を頭に巡らせる。

これは日常の中起きたバグなのではないか。あの餅つき大会の人たちは、本当に「どこで餅つきを終わらせ

るのか」を知らない人たちなのではないか。永遠のループにハマってしまい、そのまま脱出できないのではないか。

うすら寒い空気が、部屋を覆う。

映像チェックは終電間際に終了した。ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん……。おそろしいことに、まだ餅をつく音は続いていた。荷物を抱え、エレベーターからおおそるおそるエントランス前の様子を伺う。

そこには、正午に見かけた時と同じ人の顔が集っていた。なんとも不可解なことに、全員が全員とも無表情で、そして無言で餅をついている。

どうしよう。私たちは頭を悩ませた。「あの、餅つきつていうのは、なんとなく終わらせていいものなんですよ」と声をかけるべきなのか。しかし、好きで餅をついている可能性もあるわけで、だとすればそんな声をかけることは失礼にあたる。

少し間があつたのち、私たちは目を合わせ、そそくさとその場を立ち去った。

ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん……。私たちを追いかけるようにして、餅をつく音はいつまでも渋谷に響いていた。

車縦走断層紀行

② 津波・海岸・鉱山

芝野 浩貴

(地球探検家)

核燃料廃棄処理に悩む村を通過し三陸海岸に出た。

八戸〜久慈〜野田玉川〜田野畑〜田老〜浄土ヶ浜〜釜石

三陸といつてもリアス式でまとめるわけにはいかない。北部海食崖は32億から14億年前に深海底に溜まった堆積物が陸地化したもので直線、南部はリアス式海岸で、5億年前は南半球にあったゴンドワナ大陸の北縁が北上したもので、14億年前に合流。大槌町と釜石が境界。

マダガスカルの東の島には七色の大地が見れる砂丘がある。その色は赤、黄、茶、緑、青、紺、紫。酸化鉄が多ければ赤っぽく、酸化アルミニウムが多ければ青っぽくなるから赤と青の組成率で多様な色として映える。山の色に関しても新緑の季節だと成長に必要な赤系と青系の色を葉が吸収するから緑が放出されるように見えるし、秋は逆になる。白神山地の黄葉、岩木山を背景にみたらかと思われ、赤なりんご園(通りがかった日は林檎が盗まれて、全国ニュースになった時だった)。青森岩手を周っている4日間連続虹が見れた。土の色、山の色、空の色。恐山カルデラ湖の大曾利山湖は火山ガスで水が酸化され生き物が棲めないから水が透明である。硫黄鉱山であった恐山の周辺は多くの閉山した鉱山跡地があり、金も採れていた。むつ製鉄所は何故幻となったのか?龍飛岬、恐山を北限に折り返し南下して、

ウミネコの島蕪島、戦時中の海軍の監視所のある葦毛崎展望台(苦小牧まで230キロ)震災の時の流通経路を過ぎれば東山魁夷の「道」のモデルとなった牧草地の風景に出会う。上記の特異な地質が芝生海岸(種差海岸)を産み、黒松も続き、大町佳月、草野心平、佐藤春夫、司馬遼太郎、三浦哲郎などの文学表現の場所となる。久慈が海女さんの活動場所になるのは火山活動による溶岩がたくさんあるからで、2500年前には既に縄文人がアワビをとっていたらしい。ゆっくり冷えた花崗岩が多いが、「あまちゃん」の舞台のシンボルの夫婦岩は急に冷えて柱状節理が見られる。石灰藻が岩石にこびりつき白化することを海の砂漠化というが、森林から流れる鉄が昆布やアワビのオアシスとなる。少し南の野田玉川鉱山では、野田村でしか採れないマリノーズを産出して、宮沢賢治も八戸から釜石の旅の途中に寄つ

ている。釜石から内陸に向かって車で1時間ほどの距離に世界遺産でもある橋野鉄鉱山がある。橋野高炉は現存最古の洋式高炉だが、木炭を利用して日本流に組み合わせる。石見のたたらを進化させて、八幡製鉄のもととなったのは製鉄の父と呼ばれる大島高任の貢献度は高い。案内人である元釜石鉄鋼勤務の藤原さんに鉄ができるまでの仕組みを詳しく聞いた。1日4トンの鉄と8トンの木炭を使用するときの鉄鉱石と森林が確保できること。最盛期は千人いたが、炭焼きが半分。たたらと違って連続操業ができる。できた鉄は両石港から水戸へ。

鉱山ができるには火山活動が関係している。この紀行のテーマは鉱山であるが、その動機としては震災を意識している。各々の町に降りてじっくりと住民と話している時間はなかったが、3.11からの7年後の今を一気に体感した。体感というのは津波の側に立つて同時にどこからどこまで浸水していたのかを感じたということである。北部は高い断崖が続ぎ、南部になるとクネクネリラス式となり、道も上下する。各市町村の浸水地域には「ここから浸水地域、ここまで浸水地域」という道路標識が設置してある。田野畑、田老、浄土ヶ浜、やまだ、大槌、釜石と短時間だが経由しながら厳肅な気持ちになる。

女川く石巻く松島く塩釜く相馬く南相馬く浪江く富岡

気仙沼から女川まで黄金街道が続く。文字通り平泉の中ミコト寺金色堂にも供給していた金の産地である。田老ホテル(防潮堤も破壊された)や奇跡の一本松の近くのホテルや女川駅前のホテルなどいくつかは津波遺産として残っている。車というのは平地を走るのが得意で、タイヤの特質上坂道は苦手なのだが、三陸海岸を走る時の平地は浸水区域で家が少なく更地で見通しがよくなる。新築家・仮設住宅が並んでいて軽快に走るのでなく、徐行するか降りて冥福を祈る区間となった。浪岡駅から富岡駅まで福島原発を囲んだ区間17分14キロはゴーストタウンで、明かりもついてない。国道6号線を直進するのみ。歩行やバイク禁止で海側への道の入り口には立入りを禁止するための検問員がいる。福島第一原発の近くを通った時、225マイクロSv/hであった。中村敦夫の朗読劇、線量計が鳴る、ガリアルに響く。恐山の湖に生き物が棲まないのとは違う無生物の意味がある。(後に沖縄のプロボノ中に琉球新報で知ったのだが、私が訪れた数日後に石川文洋さんが歩かれて記事になっていた。この文が読まれる頃は日本橋から京都に向けて出発しているはずだ)

謹賀新年

ムフラカミ ヒロミ

（フライング・ブックマン）

子供の頃は、餅が好きだった。

今ののように、年がら年中、いつでも食べられるものはなかった（餅屋に行けば、大福くらいは買えたかもしれないし、学校の創立記念日には紅白の餅を貰って帰ったものだけでも、基本、餅は注文して搗いてもらうものだった）ので、正月は嬉しかった。

雑煮の餅は、歳の数だけ食べると言い、実際、そうしていたものだが、流石に十を超えると厳しいものがあるし、それより何より、そういう子供っぽい行為自体が莫迦莫迦しく、というよりも、最早、頭にも浮かばなくなっていく、そして今や、雑煮を食べることさえ、しんどいと感じるような歳になってしまった。

正月に親戚一同が集まることも、遠い昔のことになった。暮れには娘の嫁ぎ先の分を含めて、四白も五白も餅を搗いていた祖父母は既に亡く、叔父も一人逝き、二人逝き、今では親族が顔を合わせるの誰かの葬式の時だ

け、という有様である。

祖母が元気だった頃、時々、田舎から出てくることがあった。その時は、決まって、大きな風呂敷包みを背負ってやってきたものだが、米やら、畑の成出でものやら、彼岸時であったか、重箱一杯に詰め込んだ牡丹餅やらを持参するのが常だった。それはそれは大きな牡丹餅で、和菓子屋が作る、銘々皿の上にちんまり載っているようなお上品な代物ではなく、夕飯にひとつ食べればお腹一杯になるような、餡子もたつぷりのこつてりしたものだ。た。

高校に勤務していた頃、生徒と正月の話をしていて、餅搗きの話題になった。自分の家では毎年餅を搗くというので、餅搗き器でブーンとやるんだろう、と聞いた所が、いや、臼と杵で搗いているという。へえ、そりや珍しいなあ、さぞ美味かるうなあ、と（多分、物欲しげな顔をしていたのだろう）言ったら、冬休みに入ってから、わざわざ持って来てくれた。

いや、それが、予想していた以上に美味しくて。生地が絹の羽二重のように滑らかで、どんだけの力で搗いたんだ、と感心するような肌理の細かさで、喉越しの良いこと、絹漉豆腐か心太の如し。

そして、もうひとつ嬉しかったのが、味わいの違いう一種類があつたこと。

「いりこ」という言葉をこ存じだろうか。多分、田舎でしか使わない言葉だと思ふが、念の為、ネット検索してみると、新潟の米どころあたりでは使われているようだ。実入りの悪い米、の意で、通常、食用とはせず肥料などに回すものらしい。鳥取の方言辞典によると、八頭郡、気高郡に分布する言葉のようだ。（母の実家は、戦前は気高郡であつた）

この「いりこ」を糯米に混ぜて搗くのだと思ふのだが、ちよつと色の悪い、しかし、食感餅と団子を合わせたような、歯切れのいいもので、一度食べると、普通の長く伸びる白餅が、くどく感じられる程に病みつきになつてしまうのが「いりこ餅」である。喉に詰まりにくいので、年寄向きでもある。

これが、貰い物の中に入っていたのである。祖母の家から毎年貰っていた味である。ああ、やっぱり、作る家では作るんだなあ、と感動した。餅屋やスーパーで買うような商売物の餅では絶対にお目に掛かれない、自宅用の田舎餅である。毎年、欲しいなあと思つたが、流石に口には出さず、紅茶の詰め合わせなどを御札に渡したのであつた。

餅搗きというのは、家族が元気でなければできないから、一年を恙なく過ごし、めでたく正月を迎えることができるバロメーターと言えそうだ。我家の田舎も、祖父母が老い、搗いたり捏ねたりができなくなつて、餅搗き器に変わり、一方が寝付くようになって、それさえもなくなつた。

餅と言へば、かき餅というのもあつたなあ。藁で編んだ紐に赤や緑の薄い短冊形の餅が編み込まれている。こちらは砂糖が入っているので、火鉢やストーブに鉄灸（てつきゆう）を載せて、おやつ時に焼いて食べるのだつた。時々、母に頼んで油で揚げてもらふこともあつた。

松が取れると、注連飾りと、みかんや鏡餅、書き損じの習字などを持って、神社のとんど焼きに行く。半紙が焼けて、高く昇つて行くと字が上手くなると聞かされた。焚き上げた後、餅とみかんを取り出すのだが、真つ黒こげになつてしまつて、餅はただでさえ固いのが炭になつているし、焼きみかんというのも、お世辞にも美味しいものではなかつたけれど。

坪井日記 ⑫

齊藤仁昭

(長崎書店)

カヒミ・カリイの新刊『にきたま』（祥伝社）が入荷した。最近レコード聴いてないなと思いつながら棚に並べる前にパラパラと内容をチェック。約10年間の子育ての記録やコラム、対談などが収録されているようだ。CDも付いている。かわいい娘さん（ニキちゃん）の写真も掲載されていて、育児を楽しんでいる様子がうかがえた。

ある写真に目が留まった。ニキちゃんの頭に何かが張り付いている。カラーページではなかったので判然としないまま写真下のキャプションを読むと「今年はとにかく熱をよく出しました」というようなことが書いてある。改めて写真を見直すと、キャベツだった。やっぱりかぶるんだ！ 強烈な育児シンパシーをカヒミさんに感じたのだが、キャベツをかぶったのは私の息子ではな

く、私だった。すぐ共感しようとする軽薄な自分を恥じながらも、1歳で初めて出産を経験したという彼女の本をゆっくり読みたいなと思った。育児本は吉田戦車の『まんが親』しか読んだことがない。

*

『おどりたいの』という絵本を児童書担当者が積んで推していて、よく売れているようだ（富福まきこ著、ビーエル出版）。バレエに出会って心を奪われてしまった小さなウサギが、踊りたいという衝動を胸に、勇気を振り絞ってレッスンの門戸を叩く。ウサギの健気さにたまらない気持ちになる：幼子のひたむきさにはあらゆる冷笑を跳ねのけて手を貸したくなってしまう。

ダンスの衝動や体を大きく動かしたいという衝動は日常ではかなり抑圧されている気がする。例えば勤務中にレジでジャンプしたり、有線にあわせて体を揺らしたり、本を差す場所を悩みながら体操したりすればあまりいい印象をお客さまには与えないであろうと思ってしまう（誰にも言われていないのに。付度）。思ってしまったから体の動きが抑制される。そうして身体を緊張へ硬直させたまま手だけ動かしたりすると、どこかの部分にひずみぐる（僕は首と腰にきてます）。パブリックな空間で体を動かしてはいけないというコードはどんな恐怖に由来しているのか。他人が楽しそうに見えるのが

不快なだけなのだろうか。そんなんじゃないっつって中学校でダンスが必修化されたのだろうか。それはそれでバランスが悪いように思う。

*

気が付けばケバブジョンソンに加入して10年が過ぎていた。12月は防府の印度洋と広島の OTIS! というところでライブだった。来年もまた余所の街での演奏を続けられたらいいなと思う。ひとまず3月の神戸、大阪、京都を目標に。お近くにお越しの際はぜひ皆様もお立ち寄りくださいませ。

*

かっこいい自転車で 君の端から端を訪ね
やがて地球を百万周するだけの道を生み出すまで

かっこいい自転車で かっこいい自転車で

かっこいい自転車 俺のいい自転車

かっこいい自転車で 夜が明けたら次の町へ

なつかしい歌声や見慣れた答えをひき殺す速度で

かっこいい自転車 かっこいい自転車 かっこいい自
転車に乗って

かっこいい自転車の上で寂しい夢を見たよ
君が段々雨に溶けて流されて消える物語を

かっこいい自転車で かっこいい自転車で

かっこいい自転車 おれのいい自転車

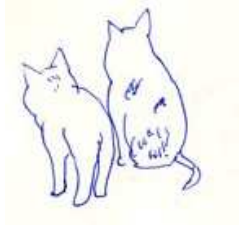
かっこいい自転車に乗ってヒップな旅に出よう

ロマンチックな歌を爆音でかけて走り続けるのさ

かっこいい自転車で かっこいい自転車で

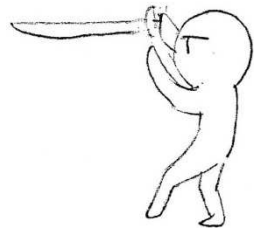
かっこいい自転車 おれのいい自転車

(ケバブジョンソン「かっこいい自転車」作詞：杉浦真寛)



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階



冬帝



五百川 知子

アシル

十二月駅に掃除のポランティア

水漬に落ちてしまひぬ薄化粧

くたくたの筋を残して草枯るる

冬月を招くがごとき高梢

冬帝に子らの讚美歌届くやう



権威性コンプレックス

戸國 航

(鳥取西高二年生)

権威性コンプレックス。それは現代日本人の多くが抱える問題である。身近なある人が社会的な栄典を付与されたとき、思わずびくびくする。もしくは、その人の能力などをよく確かめずに、手ばなしにその人のことを誉めてしまう。はたまた自分が付与されたときにはつけががる。そういう「症状」のことを私は権威性コンプレックスと呼んでいる。かくいう私もそうである。この前、私の後輩が大層な賞を受賞したとき、なんだか、それきりそいつのことが嫌になってしまった。彼がうれしさをかみしめながら、私に「戦勝報告」をしていたとき、私は微笑みながらおめでどうと言ったが、私の胸中はどよどよ騒めいていて、憎しみと虚脱がこった返していた。帰り際に「すごいねえ、やっぱり君は僕より賢いよ」と言うと、彼はそれまでずっと続けていた微笑をやめ、じっと私の目をみつめた。表情にこそ現れなかった

が、彼の目には、私に対する侮蔑と嘲笑がはつきり表れていた。私はその目によって気に当てられたように、急に立ち眩みをして足取り重くふらふらと家路についた。今思い出しても惨めな思い出である。そしてこれは自分のことだが、以前、小説のしがない賞を受賞したことがあった。そのことで最近、部活の監督が褒めてくださった。「やるじゃないか。素晴らしい小説を書くなんて」と、彼。しかし、私の小説をいっぺんも読まずにそんなことを言っているのだから、筆者の私としては心外である。このように、私たちはどうやら公的・社会的な栄典に弱いようである。このようなコンプレックスに鋭敏な人間は反権威の立場をとるか、そのコンプレックスを充足させるように権威的なものにすがるかのどちらかである。前者のほうは、コンプレックスから入るため、後には後者に流れてしまうような人間もいる。

社会的栄典の最も効力のあるものは、ノーベル賞である。そのノーベル賞を受け取らなかった人物がただ一人いる。それはかの有名な哲学者、ジャン＝ポール・サルトルである。

彼はノーベル賞拒否に際してこう述べている、「私は制度的なものに縛られ、行動を制約されたくない」と。どうやら、彼の言っていることにこの問題の本質が絡んでいそうである。社会的な栄典や、称号は普通、社会に

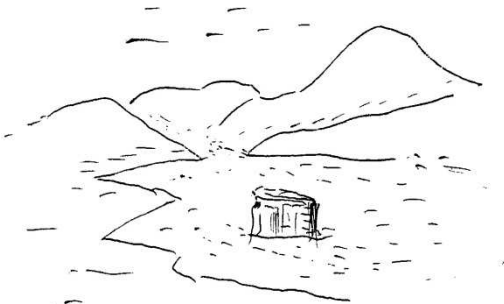
とってどのくらい有用であるかで決まるものだ。で、あるから、既存の価値観にのっとった権威付けでしかできない。また、社会体制に反抗する者の行動については権威性を付与することはできない。あくまで現在の価値づけしかできないのである。権威性を帯びた記号や称号が恣意的に大衆に提示される時、大衆の目はおのずと権威的なものに向けられる。そのため、人々はその時点の社会の有用的な行動を行うようになる。結果、本質的な活動、個人にとって真に実用的な活動は淘汰される。しかし、凡俗かつ繊細な私はそのことをわかっているにもかかわらず権威的なものにながってしまふ。どうやら、私は非常に意志の弱い人間のようなのである。はてさて、どうすればよいか。

定有堂教室「読む会」 毎月一回 いずれかの火曜日

次回 一月二十九日（火曜日）

テキスト 神島裕子『正義とは何か―現代政治哲学の

6つの視点』中公新書 2018



数が月ぶりに定有堂へ



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

鳥取へ行くのは、ほとんどが「鳥の劇場」の公演がある時だ。

市内で定有堂書店へ寄って、「森の生活者」でベールとコーヒーで一息ついて、それから鹿野へ、という予定が実現できていない。家事を終えてから、つつい出発が遅れてしまい、鳥取自動車道が西インターまで開通してからは、そのまま21号線で鹿野に向かってしまう。

やっと十一月に奈良先生がお店にいらつしやる時間を訪ねることができた。近況報告をさせていただきながら、関心の持たれている本やよく売れている本など次々と紹介していただいた。すぐその場で手にすればいいものを悩んでしまって、結局、家に帰ってから「今日、あのお話に出ていたアメリカ在住の中国人作家って誰だったかなー」と思い続けることになる。「また、今度、聞いてみよう」と思っていたところ、前号で紹介してくださっ

たので助かった。

今回、幸運にも、手招きされて予期せぬ一冊の前に立った。出版されたばかりの遠藤公男著『ニホンオオカミの最後』同著者の『ヤンコフスキー家の人々』の隣において下さっていた。岩手県在住の遠藤氏は動物作家として数々の作品を書き続けていらつしやるが、私にとつては不思議なご縁であった。

野鳥をはじめ動物全般に詳しく、ロシアの絶滅危惧種になつているアムールトラに関心を持たれて一九九三年にウラジオストクに來られた時、私と同じ職場のロシア人通訳が急用のため、私を遠藤さんの滞在するホテルへ向かわせた。仕事に必要な肝心の通訳が来ないとなつて、私とは世間話をするしかない。世間話とはしてみるものだ。遠藤さんの息子さんは、何と、私と同じ大学の同じゼミで一年下の遠藤君だったのだ。ロックミュージシャンのような格好で学内では結構目立っていたが、あの遠藤君のお父様とは：じつくりと顔を見て：長髪にしたら：遠藤君だ！

そこから話は盛り上がって、動物について書かれたロシア語の絵本の翻訳、虎狩り三代の『ヤンコフスキー家

の人々』執筆のため、ワレリー・ヤンコフスキー氏の著作の翻訳のお手伝いを私がすることになった。アムールトラについての資料収集の段階で知ったワレリー・ヤンコフスキー氏存在。白系ロシア人として朝鮮への亡命とその後の北極圏での強制収容所生活という人生を遠藤さんはどうしても書き残しておきたいと、ヤンコフスキー氏の存命中にこの仕事を成し遂げられた。

その間もずっと三十年間にもわたって、ニホンオオカミ についてずっと思いを温めてこられていたのだということを初めて知った。ロシア沿海地方で野生の傷ついたアムールトラを保護されていたユージンさんも専門はオオカミで、ニホンオオカミについて熱く語られていたことを思い出す。私にとっては、ニホンオオカミ？山に行けばいるでしょう、とぐらいにしか当時は思っていなかった。なぜ、ユージンさんもニホンオオカミを研究テーマにし、あれほど固執していたのか、やっど遠藤さんの本からわかった。

実際にオオカミが生息していたことを記録や人々を訪ね歩いて聞き、そして絶滅に追いやったのも私たちである。私は「日本人がどのようにオオカミと付き合っていたのか」と関心を持って読み進めたが、遠藤さんは「ふ

るさとの狼がどのように生きたかを伝えることができた」と述べられている。いつも動物たちの目から世界を見ておられる。遠藤さんの情熱、自らの足で歩き、過去の公文書や文献の一つ一つ当たって調べていかれている執念とでもいえるべきものを尊敬する。

定有堂書店では、やはり、鳥取関係の本を手にしたくなる。今回は『さんいんキラリ』、ここには奈良先生のおすすめカフェが載っていた。そして『鳥取が好きだ。水丸の鳥取民芸案内』水丸さんは鳥取が大好きだったのだ。鳥取への愛情あふれる文と絵。どのページを開いても嬉しくなる。

定有堂書店から歩いて二、三分のところには、「鳥の劇場」ファミリーの一員かしらと思われる「ギャラリー鳥たちのいえ」がオープンしたそうだ。イベントや展示会場になったり、二か月に一度はミニミニシアターになったり、市内にまた一か所訪れたいところがあった。

新しい年にはもう少し鳥取に行く機会、定有堂書店へ行く機会を持てるようにしたい。ケン・リュウ著『紙の動物園』『ものあはれ』も読んでみたい。これで二〇一九年の目標、決まり。

鳥取あれこれ その二十九

内田克彦

(地域研究家)

プッチーニは久子を訪ねてオペラの構想を説明し、日本の歌曲を教えてくれるように頼んだ。しかし久子の手もとには、多数のヨーロッパ歌曲の譜はあるが日本のものがない。そこで久子は、同年生まれで旧知のピアニスト幸田延子(こうだのぶこ)氏を煩わすことにした。

(中略)

日本歌曲のオペラへの取り入れ方についても議論した。明治維新時から夫の綱介も好んで口ずさんだという「宮さん宮さん」の取り込みかたには賛成だったらしいが、カッポレは品の悪い歌であるとして使用に反対したという。

このエッセイの中には、三浦環(たまき)も出てくる。

環女史はそれ〔筆者注、一九二〇年〕より六年ほど前、彼女の留学先ドイツと日本が交戦状態に入ったためイギリスに逃れ、そこで久子の長女である私の母から、オペラを歌うためにイタリア語を習い、ロンドン社交界への紹介を通じて初の発表会にこぎつける援助を受けた

念のため、壽夫を编者とする一九八五年に発刊された『澤田節蔵回想録』を読むと、詳細に書いてあった。

(承前)

澤田節蔵の五男に壽夫(としお)がある。彼が二〇〇九年に発刊した自伝『星を仰いで 大戦の前から現在まで』を読むと、いろいろなエピソードがわかる。例えば、一九三二年六月に生まれた彼の名前は、壽府つまりジュネーブからきており、そこで生まれるはずであったが、国際連盟脱退により帝国事務局長であった父節蔵が日本に引き揚げたため、日本で生まれた、こと等。

さらに、母方の祖母の久子(ひさこ)は、祖父の駐伊公使大山(おおやま)綱介(つなすけ)とともにローマに在って、『蝶々夫人』を作曲したプッチーニに日本の伝統と音楽を伝えるなど、日欧文化交流に努めた、とあった。奥付ページ of 著者紹介欄に、エッセーとして「『蝶々夫人』と祖母大山久子」があるとされているので、調べてみると、『中央公論』一九九八年七月号に詳しく記載されていた。

環さんがロンドンに來られて二年めに、(略) マダム・バタフライに環さんが主演することとなった。(略) とにかく主演要請ということは本人はもちろん、われわれにも朗報であった。環さんにとつてはじめてのオペラ主演であり、またイタリア語で歌うことになるので、家内がイタリア語の歌の意味と発音を教えるように頼まれた。家内は結婚前約七年を両親とともにローマに過ごし、イタリア語は相当できたのである。そういうわけで環さんは、初演までの二ヶ月ほどのあいだほとんど毎晩宅に來てイタリア語の勉強に打込んだ。

因みに、手元にある一九七七年発刊の文庫本の瀬戸内晴美著『お蝶夫人』に当たってみた。「日本の大山綱輔(「ママ」)公使夫人の久子さん」は出てくるが、「イタリア語の発音は同宿の野上俊夫博士に教えてもらい」としか書かれていなかった。

ところが、これらの話を集大成した著作が今年二月に発刊されていた。萩谷由喜子著『蝶々夫人』と日露戦争 大山久子の知られざる生涯』である。「あとがき」に、壽夫の『中央公論』への寄稿文を読んで「夢かと驚いた。」とある。

遠い存在とばかり思っていた公使夫人久子とその夫の

大山綱介公使に、突然対面できた気分になったからだ。寄稿者の澤田壽夫氏は国際取引法の権威で、大山綱介・久子夫妻の長女、澤田美代子夫人の五男である。一九一年に没された祖父の綱介とは会われていないが、一九五五年に帰天された祖母の久子夫人とは頻繁な行き來があり、数々の貴重な思い出話をじかに耳にしておられたのだ。

萩谷氏がようやく壽夫を訪問したのは、二〇〇六年、「第12話」に「人種を超えた理想郷を目指した琥珀の女王 ジョセフィン・ベーカー」を取り上げ、その中で壽夫の叔母、澤田美喜についても触れている『音楽史を彩る女性たち 五線譜のばら2』を発刊したばかりのときであった。

萩谷氏は書く。「三浦環の『蝶々夫人』成功の陰には、澤田美代子による懇切なイタリア語のコーチがあり、そもそも、オペラ『蝶々夫人』の成立の過程には、美代子の母、大山久子によるプッチーニへの貴重な助言と資料提供があった。」

『蝶々夫人』に関する「大山久子と澤田美代子の母娘二代にわたる貢献」、調べてみて驚いたことだった。

(以下、続く)

二〇一八 一一・一七

埋もれ逝く名歌

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

千年を悠に超へ蘇る萬葉の名歌に就ひて書ひた。反対に今、忘れ棄てられゆく名歌が。「女の愛と生涯」、シャミツソウの詩に附曲したマシューマンの歌曲ツィクルス※は「詩人の戀」と並び独ロマン派、此の分野を代表する逸品と謳はれ、女性歌手達には「リサイタルで一度はかけてみたひ」憧れの名曲だった、しかしそれも今や過去形になりつつある…

I

行き過ぎたフェニミズムがヒステリック、声高に男女同権を叫び女性の地位向上を訴へる風潮にあつて、封建的・男性社会の造り上げ強いて来た、恭順でしおらしひ昔の女性観に迎合し其の理想像に憧れを抱せる、古臭い価値観は怪しからんと、そんな訳で實際、僕が學生の頃と違つて現在此のレパートリーが舞台にかかる事も新盤リリースも激減した。

II

名歌手B・ファスベンダー。オペラやオラトリオだけ

で無くリート（芸術歌曲）の分野でも目覚ましひ活躍をしたメゾ。進歩的な女性の最先端を往く彼女はシューマン歌曲でも名演を遺したけれど、「女のー」は敢へて撰ばず「詩人の戀」を熱唱した、殊更のやうに。有名なレズビアンとしてあんな女の生涯なんて糞喰らへ！の心境だったらう、それはそれで良し。しかし本当に独浪漫派の詩人達、シャミツソウとシューマンは、男尊女卑を訴えたかつたらうか？

III

此処に描かれた、健全で極めて小市民的、ささやかで可憐な、さうして現代の視点から見ると些か古臭い佳き女性像はリステレオタイプな人間の姿を呈してゐるが、歴史的な過去の作品を鑑みる場合、いつもさうであるやうに我々は、先ず物語の成立した当時の社会状況を客観視する必要がある。シューマン達ビダーマイヤー市民は、往時の男女、そして其の生涯を描く事に拠つて人生や自然の輪廻（宗教的な意味では無く）をしみじみ語りかけてゐる。父や父祖がさうであつたやうに男は雄々しくあらうと女々しひ健気な努力を試み、女は、母、祖母の如く聖母を範として女性的であらうと鼻息荒くもがいてゐる。その姿は極めて拙く幼くぎこちない、けれど健気で、良い意味で自然、健康的。L.レーマン、E.シューマン、E.シュヴァルツコプフと云つた名歌手達が好んで唱ひ、

ピアノパートもG.ムーア等の名ピアニストばかりで無く
B.ヴァルターのやうな人迄愛奏するレパートリーと成つ
た。

IV

描かれてゐる女性像が古臭いからと云つてまう、此の
物語は必要無いのだらうか？ 小市民の歎びなんて詰まら
ない！ と云つてワトローやミレー、レムブランドやフェル
メールの市民像に覆いを被せ埃積もらせ倉庫の奥に追ひ
やる蛮行は慎むやうに、こんな女性像が古臭いからと云つ
て、此処で歌はれた人間の眞實、愛を描くポエジーの純
粋さ迄奪い去つて了ふのが果たして進歩的？ 微細な所に
行き詰まつて本質を見失なふ事無きやうにしたひもの。

古からの男らしさ・女らしさの理想とジェンダー差別撤
廃は果たして同居し得ないのだらうか？ 女性が雄化する
事が進歩的？ 僕は此のビダーマイヤーの市民達を擁護す
る立場にこそ在りたひ、一人のシューマニアナとして。

2018. 11. 28

※1 連作歌曲集、特にシューマン等は調性や構造を全体が環の
やうに循環し有機的な構成で、あたかも歌手とピアノ2人の樂手
によるサロンに於ける室内樂的な劇作品になるやう設えた：※2
「女のー」は、或る特定のメロディと云つた人の物語ではなくモー
ツアルトの「コジ・ファン・トゥツテ」、女は皆かうしたもの：と

同じく女性全般に就いて歌はれてゐるので問題：

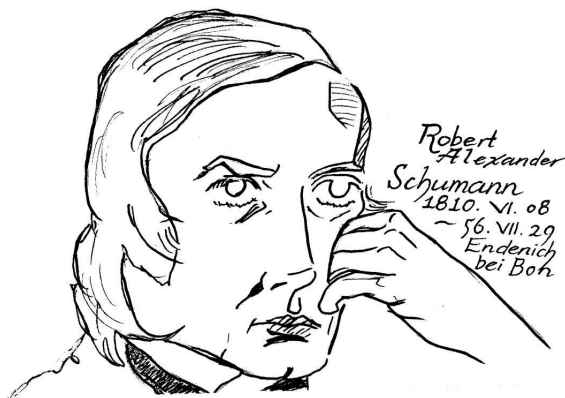
「今回の一枚」R.シューマン「女の愛と生涯」作品42 (1842)

(全7曲)テクストA.ハ.シヤミツソウ①I.ゼーフリート/E.ヴェ

ルバ (1957) ②S.ユーリナツチ/F.ホレチェック (1953) ③I.

ポップ/G.パーソンズ (1980)

画. A. T



おでんと豚汁

あきの素生

(くうねるめがね)



秋ごろから、今年は暖冬だとちらほら耳にした。実際冬になってみると、たしかに例年と比べて暖かい気がする。こたつを出し、お弁当箱をスープジャーに替え、雪用の長靴を出しておかなきゃなあなんて考えたりする。いつもの冬支度だけれど、いつもよりゆるやかにこなしてきた。

冬は好きだ、と、手放しで言えない。朝起きるのが辛い。布団から出るのが辛い。雪が降ったら雪かきが辛い。マスクをすると、めがねが曇る。うどんを食べても、めがねが曇る。室内に入るだけでもめがねが曇って、少しばかり困る。「めがねかけ」には受難の季節だ。

でも、雪が降るときの匂いや、冷たく、しんとして、清々しく張りつめているような空気は、とてもいい。早めに家を出て、猫かなにかの足跡を見ながら、新雪の上

を職場まで歩く。年末に再会した友人と、夜空を見ながら、中学生の時と同じように家まで並んで帰る。あまり人通りのない、家々の間の道を通って、近所の神社に初詣に行く。冬の空気は、なんとなく自分と周りを隔てる。静けさのせいなのか、湿度のなさのせいなのか、輪郭がはっきりするとうか(夏は、暑さと湿度で自分の端っこがほんの少し溶けだして混ざり合っているような、でもそれもどうでもいいような、真逆の感じだ)。そんな空気の中を、マフラーに顔を埋めて歩くのは心地よくて、なんてことのない記憶も好ましく思い起こされる。

前出のスープジャーは、忘年会のビンゴで当たったものだ。それから、冬のお昼ごはんは、あつたかい汁物とおにぎりの組み合わせが多くなった。鍋物や汁物で、野菜がたくさん食べられるのも、冬のいいところだと思う。レパトリーはそんなに多くない。鍋なら、よほどのことがない限り水炊き。シチューよりカレーが好みだが、カレーは冬に限らず食べる。ただし、水炊きとカレーは、お弁当に持つていくことは、ほぼない。ポトフは、トマト缶を入れて、トマト味にすることが多い。

おでんももちろん好きだ。けれど、一昨年、意外と野菜入っていない、と気付いた。最近野菜食べてないなあ、よし、おでんを作ろう、と思ったまではよかったが、自

分の作るおでんには、大根くらいしか野菜を入れないのだった。それまで野菜という切り口でおでんを捉えたことがなかったので、ちよつとした衝撃だった。こんにゃくは、こんにゃくいもから作るから、ぎりぎり野菜か？練り物をごぼう天にすれば、多少は…などと、いかにしておでんで野菜を摂るかを真剣に考えた。別に、じゃがいもとか、にんじんとか、ロールキャベツとかを、自由に入れればよいのだと思う。しかし、小さい頃から培ってきた、自分の「おでん像」というものがある。大根、こんにゃく（三角に切った板こんにゃくも、結びこんにゃくも、どちらも好物なので、最近では両方入れる）、たまご、牛すじ、練り物。もち巾着は、マストではないが、あればうれしい具材だ。練り物は、元々そんなに好みではなかったの、一度入れずに炊いたことがあるが、何とも味気なく、おでんの旨味は、牛すじ以上に練り物が担っているのだと思知らされた。以来、練り物には一目置いている。話が逸れた。結局、野菜が摂れなくなっておでんが好きなのだ。ただ食べたいから食べるという至極素直な気持ちで、「自分のおでん」を作っている。

打って変わって、具材の自由度が高く、お弁当の登板回数が多いのは、何と言っても豚汁だ。冷蔵庫にある大抵の野菜は、豚汁の具になる（ピーマンは試したことがないが…これからも試すことはないだろう）。豚肉と味

噌が入っていきえすれば、それは豚汁だと思っている。お箸が立つくらい具をたくさん入れれば、お昼の立派なメイン料理だ。作った直後もいいけれど、一晩置いて、お昼に持つていくために再び火を入れた豚汁は、具に味が染み込んでいて、いっそう旨い。ゆがいたそうめんを入れて、にゅうめんとして食べるのもまたよし。ちなみに私は「とんじる」と呼ぶ。

今回のテーマは「おでん」と決めて書き始めたが、書いている途中に豚汁を食べたら、どうしてもこちらも書きたくなった。しあわせなことだ。

（イラスト・あきの素生）



なりたい話



ドラマメリア

(座敷わらし)

幼い頃何になりたかっただろう。小学校に上がりたて頃は、ぼんやりと「お花やさん」「ケーキやさん」ぐらいを思い浮かべていたように思う。理由も「好きなだけケーキがたべられるから」とかそんなわいもないものだった。

今年小学一年生の姪っ子がなりたいものは、だいたい人外だ。初めは「おさるさん」で、理由も「いつでもバナナを食べられるから」だった。その次が「ちようちよ」。道端で卵をいくつも採ってきて飼育し、羽化までを観察するのが趣味の彼女は、イモ虫に実に詳しい。身体を丸めてじっとする「ぜんよう(前蛹)ちゃんごっこ」にさんざん付き合わされた。

この夏の最新版は「カエル」。カエルのどこにどう憧れたものか、自分のことを友達の前でも「ケロちゃん」と呼んでいるようで、大丈夫なのかそれ、一人称名前呼びよりも痛いのでは……と彼女の社会生活をひそかに心配していた。

そしてついに、なりたいものが人間にランクアップしたよ!

と彼女の母親(姉)から朗報がもたらされた。そうか、やはり小学校に通うようになるとお姉さんになるのね、それで何になりたいって?

と訊くと、意外な答え。

「てんのうへいか」。

……うむ、斜め上。ついぞ、なりたい、なれるという職業カテゴリで捉えたことのない存在。子どもって面白いなあとつくづく思う。しかも浴室で秘密の練習に励んでいて、大人には見せてくれないらしい。鶴の恩返しか。この年末に特訓の成果を披露してもらえるのを、ひそかに楽しみにしている。



・編集後記:

忘年会のビンゴゲームで缶ビールが当たりましたが、呑めないのので物々交換。マグボトルを入手しました。最近ノンカフェインのお茶をいろいろ試しているので、職場に持って行くかと思えます。

ドラマメリア(編集長)

小冊子「音信不通」、新しい年に三十号という区切り。副題に「本のピオトープ」。どういう雑誌なの?と聞かれたとき、「本」が好き、小さな世界(身の丈)が好き、そしてなにより「学び系」と答えたことがあります。

奈良敏行(発行人)